

第6回北九州市新成長戦略推進懇話会議事録

日時：平成28年2月10日（水）

13:00～14:30

場所：ホテルクラウンパレス小倉
3階 ダイヤモンドホール

事務局（新成長戦略推進室長）

予定時間となりましたので、ただ今から「第6回北九州市新成長戦略推進懇話会」を開催いたします。私は、本日の進行を務めます産業経済局新成長戦略推進室長の加茂野と申します。よろしくお願いいたします。

最初に、配布資料の確認をさせていただきます。まず、資料1「北九州市新成長戦略改訂版（素案）の概要」、資料2「北九州市新成長戦略改訂版（素案）」を配布しております。不足がございましたら、お申し出ください。

なお、構成員の皆様のご紹介は、お手元の名簿及び配席図をもって代えさせていただきます。

それでは、北九州市長、北橋よりご挨拶申し上げます。

（北橋市長）

お忙しいところ、第6回の懇話会にご臨席をいただき、誠にありがとうございます。

この新成長戦略を策定して、その後のフォローアップを含めまして、識者の皆様方には格段のお力添えを賜り、誠にありがとうございます。

この会合には、後ろのほうに各部局にまたがることもございまして、約30名の幹部職員も一緒にお話を聞かせていただいております。

まち・ひと・しごと創生の動きは、全国的に各自治体に取り組んでいるところでございますが、おかげさまで昨年の秋に市民、各界の皆様の助言を賜りまして、総合戦略をまとめて、その実行に着手したところでございます。

そういう中で、かれこれ2年越しの政府への要望でございました、国家戦略特区の選定を昨年末受けることになりました。もう1つは、G7のエネルギー大臣会合の北九州開催がございまして、いずれも、政府の皆様の配慮によりまして、実現をしたところであります。

この特区のほうにおきましては、ロボットの力、あるいは産業医大等のプレーヤーの力に着目をいたしまして、日本で初めて介護支援ロボットなど、特別に思い切ったチャレンジができるようになりました。また、政府によりまして、既に特区で選ばれている、例えば仙台の森のほうでドローンを飛ばしたりしてはいますけれども、他でやっている特別なことも、北九州で合意して政府が認めれば、チャレンジができるというふうに、先行事例も我がものに頑張ればできるという、大変発展性のある特区だと聞いております。

そして、またG7の大臣会合では、地域推進のための各界の委員会を立ち上げておりまして、せっかくのチャンスなので、北九州の魅力、あるいは企業の先端的な取り組みをもっと商売っ気を出して、しっかりとアピールして、今後につなげるべきだというご意見も頂いているところでございます。

国・県との連携を一層強めて、地方創生の成功モデルを目指して努力しているわけですが、県知事との間のトップ会談におきましては、何といたっても、空港の活性化について新たな合意をいたしております。これから向こう3年間を、特別な強化期間と位置付けまして、新聞によりましてLCCの話など出ておりますが、他の県に比べて、そんな色のない助成措置を県と市でつくりまして、しっかりとうまく空港の活性化につなげるということ合意しているところでございます。

また、国によりますと、観光立国、インバウンドの着目ということがございますが、クルーズ船を初めて響灘の深い海に着岸ができるように制度改正を既に行いまして、現在、営業を展開中でございます。今年の夏以降、大きなクルーズ船が入るように努力をしているところでございますが、それにしましても、素通りされないように、小倉城のリニューアルでありますとか、さまざまな魅力の演出というのは、時間との競争で急がねばならないと、こう思っております。ということで、大変明るい追い風のニュースもございます。

また結びに、昨日は東京で、港湾の関係のビジネスセミナーを毎年1回行っておりまして、特別講師に舩添知事さんにお越しをいただきました。北九州のいろいろな可能性に触れながら、東京都の将来について熱く語られたわけでございます。

若干、ご紹介いたしますと、東京の水の都という、水辺と市民の生活ということに着目をして、そこに世界一のアメティのいい都市環境をつくるというのが、知事の豊富ということで、北九州におきましても、洞海湾でありますとか、紫川であるとか、そういった水辺をさらに活かした、この地域の資源をもっと活かすべきだというお話が最初にありまして、それから火野葦平さんを挙げられまして、文学的資源というものにもっと着目をしてほしいことと、平野遼さんなど、美術においても優れたアーティストが輩出されていると。そうした文化的な資源というものも掘り起こして、発信をすると、もっともつとにぎわうのではないかと、こんなご所見も頂いたところでございます。

これから、新成長戦略の改訂版という、素案を作らせていただいておりますので、このもろもろのいろいろな動きの中で、識者の皆様方の忌憚のないご意見、ご指導を賜りまして、しっかりとこのまちの活性化につなげていきたいと思っておりますので、今日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局（室長）

今回は、重淵座長がご都合により欠席のため、松永構成員に座長代行をお願いしております。松永座長、恐れ入ります、一言いただいてよろしいでしょうか。

（松永座長）

松永でございます。また、前回に引き続きまして、重淵座長がご欠席ということで、私が代行を務めさせていただきたいと思っております。

市長のお話にございましたように、着々と新成長戦略が進んでおります。特に、やはり成果というところを、この会のメンバーの皆様方に意識をしていただいて、いろいろご意見を頂きたいというふうに思っております。

今日は、少し時間がタイトですので、できるだけ皆様方、早速でもご意見を賜りたいと思っておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

事務局（室長）

松永座長、ありがとうございます。

それでは、議事に従って進行します。次第に記載しておりますとおり、本日は、新成長戦略改訂版（素案）の内容について、ご議論いただきたいと思っております。

なお、大変申し訳ありませんが、公務の都合により、市長はここで退席させていただきます。また、梅本副市長は、14時ごろに退席させていただきますので、ご了承下さい。

また、事務局が用意しました、新成長戦略改訂版については、事前に説明にお伺いしておりまして、本日の時間も限られておりますので、事務局からの報告は行わず、早速、議論に入りたいと思っております。

それでは、ここから先の進行は、松永座長をお願いいたします。

(松永座長)

それでは、今ご説明がありましたように、既に皆様方のほうには、この内容についてはご紹介しているということですので、早速、議論に入らせていただきたいと思います。

方向性が5つございます。その中で、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴという形で、ご議論いただきたいと思います。まず最初は、方向性Ⅰ「地域企業が元気に活動し続ける環境整備」、方向性Ⅱ「高付加価値ものづくりクラスターの形成」。この2つの方向性について、皆様方のご意見を頂きたいと思います。どなたかご発言、何かありませんでしょうか。

(石田構成員)

方向性ⅠとⅡというお話だったのですけれども、その前に、全体感で少し意見がございまして、発言させていただきたいと思います。

今回、成長戦略の改訂版ということで、新たな気持ちで見直すという主旨との理解です。改訂版を拝見した際に、非常に硬いと感じました。言葉だけ方向性のテーマを並べてみますと、環境整備、クラスター形成、産業振興、拠点形成と続き、箱物のイメージが強くなっているように感じます。

当初は北九州市においても成長戦略を作るのかということで、自らの市の成長戦略を作り、意見を出し合っていくという期待感・高揚感があったと思いますが、具体的に施策が進んでいく中で、各々は正しいものであると想定され、理解できるのですが、その表現として、5つの方向性として括ってみると、一般の市民にとっては理解しづらいように思え、市の成長戦略と市民の期待がかけ離れていきはしないかというような危惧を覚えてしまいます。

これから先、各々の方向性について議論をしていくわけですが、できればこの「方向性」の上に何か目指す姿、つまり、一生北九州で暮らしたいとか、一生住みたいとか、そう思われるまちの条件とは何なのか、というスローガンがあって、その下に、例えば子育てがしやすい、優秀な人材を育てる教育の場がある、子どもが優秀に育つ、働く場があって食うに困らない、年をとっても安心して暮らせる、食べ物がおいしい、にぎわいがある楽しいとか、そういう市民目線でのイメージを打ち出し、それをつくるためにどうするかということも多くの人に共感いただけるようなテーマとして設定した方がよいのではないのでしょうか。その中の施策については、この5年間ではこんなことを準備することによって産業が活性化するとか、こういうサービス産業が振興されないといけないとか、具体的には現在あがっているような方策になるのではないかと感じます。

(松永座長)

ありがとうございます。これは、非常に重要な問題で、この中でも目標像として先端産業都市と書いてあるのですけれども、読めば、豊かな生活と書いてあるのです。その豊かというイメージがなかなか具体的にイメージするのが難しいと思うのですけれども、それについて何かありますか。

事務局(室長)

これともう1つ、重要概念というか「元気発進!北九州」プランがあって、その下に、今度作りました、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」があります。この新成長戦略の位置付けは、まち・ひと・しごとの中のしごとにかなりウエートを置いております。まち・ひとのほうでは、総合戦略の中では暮らし向きとか、子育てというテーマについても掘り下げているのですけれども、ここはその中の、3つのうちの1分野がメインになっているので、もちろん産業と豊かな生活というのは密接につながっているのですけれども、どうし

でも産業のほうにシフトをしているものになっております。

これは3年前に、有識者の皆さんと議論をして作っていったものを、今回赤いところが多いようにありますけれども、表現が変わったりしているところもありまして、実際には7年間のプランのうちの3年過ぎて、ある程度見直していこうという形なので、この方向性のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴというのは、3年前に作り出した時は、7年間のプランとしてはこの形でいけたらなというふうに思っております。

(産業経済局長)

今のご指摘については、表現の仕方が硬いというところでございましたら、この趣旨は変えずに、もう少し市民目線でいったらどうなのかという形に、少し言い方は検討させていただきたいと思います。方向性は、こういう方向でいかせていただければとは思っておりますけれども、表現を考えたいと思います。

(松永座長)

ここはすごく重要で、多分、この成長戦略を議論と成果という形で、やはり市民に広報されるではないですか。その中で、非常に分かりやすい形というか、はっきり言えば、市民の方が、私もこれなら参加できるよねみたいな、そういうものが出てくると、まち全体がすごく活気づいてくるのではないかなという気がします。そういうことも含めて、考えていただければと思います。この件は、それでよろしいでしょうか。

それでは、話を戻させていただきます。具体的に方向Ⅰ、Ⅱについて、何かご意見がございませんでしょうか。

(船越構成員)

今の話の続きなのですが、Ⅰ、Ⅱ別とかに議論しないといけないのですか。全体について……。

(松永座長)

全体でも結構です。

(船越構成員)

後からコーナーがあるとか。

(松永座長)

ないです。全体で結構です。

(船越構成員)

前回も同じようなことを言ったので、何となく再放送的になるのですけれども、まず、ここに掲げられている施策は全て、今、間違っていないというか、正しい、あるべき施策だとは思いますが。それを推進するにあたって、どうしたらいいかということ賛成の立場から、全体に関して意見を述べさせていただきます。

個別の施策は、そのとおりですけれども、その中でやはり、ある程度きちんとパフォーマンスを出していこうと思うと、2つくらいの軸があると思うのです。1つは、全てを行政が主導的にやるというのは大変難しいと思うので、行政が主体的にやる部分と、ある程度民間に促すというか、させるというか、そういう部分の仕分けがないと、なかなか全てを行政が主体的にやるというのは難しいと思うのです。その辺の、恐らく仕分けがされるべきだろうというのが1点です。

2点目は、では、行政が主体的に進めるべき項目が具体的にある程度色付けされた後に出てくる話題として、やはり北九州市が強みをもって主体的にやるもの。要するに、優先順位の話をしているわけですがけれども、特にロボットとか、この辺は特区も採れたし、かなり優先的に、特に進めていこうということだろうと思うのです。一方で、例えばそれが何にあたるかというのは、当該産業の方もいらっしゃるのではなかなか難しいかもしれませんが、例えば、本当に農林水産業とか、そういったことというのは、やらないというふうに言うのは難しいのでしょうかけれども、ある程度優先順位的には考えておかないと、なかなか全部ということは難しいような気がします。

その中で、優先順位という議論の中の、もう1つの視点として、例えば方向性Ⅱで出てくる自動車の問題、あるいは他にもありますけれども、いわゆる広域でやるもの。例えば、全部、北九州市で部品を作ろうなんていうのは、宮田もあれば、行橋もあれば、豊前もそれぞれあるわけなので、要するに面でやる。だからある意味でいうと、他がやっているところは北九州市でやらずに、そこはうまく連携してやるみたいな、そういう北九州市という枠組を越えてやるものとか、十分にうまく仕分けをしていかないと、絵に描いた餅になってしまうと思います。

書かれている内容は、全て方向性としては正しいと思いますので、今言った2つの視点、行政が主体的にやるものと民間主導でやるものの仕分けとか、行政がやるべきものの中での優先順位の明確化を。それをももちろん外の人に対して、これは優先順位が高くて、これは低いですというのは、なかなか取り扱いが難しいと思うのですが、行政の中としては優先順位、あるいは他と組む中で、どういう折り合いを付けていくみたいな、そういう戦略みたいなことを、議論されていかれていると思うので、その辺の議論をより進めて、少しでも具体的な果実がなっていくというようなことを期待したいと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。それでは、こういう意見が出ますので、もし全般的にあれば、今、最初に言っていたきたいと思います。どうでしょうか。

(自見構成員)

今のご意見とダブるのですが、これをずっと読んでみると、簡単に一言で言ったら、文章として主語がないのです。行政がやろうとされているのか、市民にやってほしいのか、企業にやってほしいのか、あるいは三位一体でやりましょうという単なる呼びかけなのか。

それで、行政がやろうと思えば、年間予算措置するときに、この取り組みは幾ら予算を付けますと、そういう数字が付いてないと、単なる理念として言葉が並んでいるだけになるし、大部分の他の都市もみんな似たようなことを書いていると思うのです。

私たちは、北九州のまちの地力としては、あらゆるレベルで見て、非常に将来性、可能性、総体的にはあると思っています。そういうことから言えば、市民が本当に的確に我がまちのことをもっとしっかり知ってもらえればいいなど。先ほど、市長の話にもあったような文化的な面から、自然の面から、あらゆるところで、非常に可能性は秘めていますので、そういう形を着実に知らしめていきたいということ。

何が何でも全体の中で、この分野だけは、とにかく全国で北九州が一番突出してやれる分野だから、行政から見ても、予算から何から見ても優先的にやりたいとか、そういうランク付けというのはどこかで出てこないか、これはあまりたくさん並べすぎていて、言葉だけが並んでいて、金はどこから出てくるのかという疑問が必ず出てきます。

それと、私は中小企業団体で出てきていますが、中小企業施策を一番最初に挙げていただいているわけですが、今もう国を挙げて補助金行政なのです。ちょこちょこ補助金出して、それでしっかりとした……私はいろいろな所で言っていますが、中小企業

はもう少し付加価値の高い仕事をしてくださいと、すぐにおっしゃるのだけど、皆さん方が付加価値を測る物差しはどんな物差しを使っているのですかと。単純に、要は決算で黒字を出した所が、付加価値が高いと認識されているだけではないのですかと。もっと下支えしている本物の中小企業の存在というものに目を向けてくださいと。

これは、私の体験で言っているのも非常に申し訳ないのですが、学校を出てすぐ5年間大阪にいたのですけれども、その2年間くらいは無茶苦茶な肉体労働をしたのです。本当に就業前から夜遅くまで、100 kgくらいを肩に、まだフォークリフトがない時代ですから。そういう過酷な労働をずっとやっても、ボーナスが出た時には、2、3年先輩が飲み連れていくと言って、その時は無茶苦茶、会社や上司に対して文句を言うわけです。この人たち、あしたすぐ辞めるかも分からんというような雰囲気だけど、ひと晩たつとみんなけろっとして、平然と日常の仕事につく。

その時、私が大学の先生にすぐ手紙を出したことがあるのですけれども、日本の戦後はなぜこんなに急激に復興できたかといったら、中小企業の本当に一人一人の細胞といいましか、仕事に対して、勤務先に対してサボタージュしないで、きっちりやるという、そういうモラルがぱしっと、日本人のモラルに付いているのです。この細胞が、非常に健全だったので、あつという間の復興ができたのですよねと。これが、日本の経済を動かしている一番の、エネルギーの大源泉ではなかろうかという感想を出したのです。

今でもそういう世界がずっとあるわけです。少し成功した事例というのはたくさんというか、目に付くところはあるわけです。そればかりいくら拾い上げて、全ての中小企業はそうなりなさいというのは絶対に無理なので、今は公共工事、建設工事の現場にしる何にしる、そうやって本当に、身をもって自分の肉体を通して仕事を覚えている人たちはずっといるのです。付加価値は付けているわけです。付けているのだけれども、それにふさわしい対価を頂けていない。

それは、要するに価格の問題だけで、今、ゼネコンが談合をやったらいかんよとか、そういう価値感がずっと下のほうまで染み込んできていますので、行政も国も県も市も中小企業条例のようなものを作ってくれているのです。それは非常に立派な言葉を書いているのだけれども、現実に仕事を発注している側の方は、どんな小規模の発注であっても、競争見積もりを広く取りなさい、その地域だけではなくて、日本全国から、世界から取りなさい、そうやって、要するに安いことだけが正義という価値感が、日本中にもう定着してしまっているのです。

だから、そういうことではなくて、やはり一人一人が汗流して働いている現場に対しては、本当にご苦労さん、お疲れさんという声を掛けるような形で、それにふさわしい対価を払っていただける。そういうまちに変わっていかないと、いつまでたっても中小企業というのは浮かび上がれない。そういう人たちが日本の人口の中の半分の部分なのです。だから、いい仕事、新しい仕事をやれば、あなたたち、過当競争の世界から卒業できるよと、そんな理屈はあり得ないのです。だから、そういう形の中で本当の、今、消費者団体から何から全てのものが安いことだけで正義になっています。

私、よく言いますがけれども、昔の近江商人が歩いた後は草木も生えぬと言われていたけれども、彼らはその後、共同組合をつくっているのです。今の商工会議所みたいな組織でしようが、非常にしっかりした会則を作って、入会金も払って、それに入るのがステイタスですよ。彼らが言っているのは、売り手よし、買い手よし、世間よしなのです。今のCSRとか、そんな難しい言葉は使わなくても。

今の日本の世の中は買い手よし、だけになっているのではないのと。売り手よし、買い手よし、世間よし、こうなってくれないと困るのですと。あくまでも買い手よしの議論だけがまかり通っているという感じです。だから、中小企業、商業も含めて、非常にみんな苦労している。そういうのが印象でございます。よろしくお願いいたします。

(松永座長)

ありがとうございます。ほかに何かございませんでしょうか。

(濱村構成員)

冒頭に、国家戦略特区の指定の話や、今年も東京ガールズコレクションが開催されるということで、明るい話題がいろいろ続き、そういう明るい話題が地元経済に落ちていくといいなと思っています。

私たちの業界で申しますと、業界団体的には、今はもう、どこに行っても民泊の話ばかりで、民泊はどうなんだということで、ただ現実的にいろいろ考えますと、集合住宅の民泊というのは非常にまだトラブルが多いので、どちらかというところだとゲストハウスや、戸建とか、そういったもののほうが、現実的には着手しやすいのかなと思っています。

今日の新成長戦略の、方向性Ⅰ「地域企業が元気に活動し続ける環境整備」のところですが、1件報告をさせていただきたいと思います。

今、サービス系企業とものづくり系企業との研究交流会を立ち上げまして、先般2回目を開催しました。これは、地元の企業同士が業種業態を越えて学びの場をつくるということと、もう1つは異業種視点で捉えることによって、次の成長の種を参加者の皆さんに見付けていただきたいということでスタートしたのです。

1回目は、どうなることやらというような少し堅苦しい雰囲気の中での開催だったのですが、2回目は、ちょうど昨年、イクボスアワード 2015 であつたり、キャリア支援企業 2015 という厚生労働省主催の賞を受賞されました若松の芳野病院の芳野院長に来ていただきまして、自社の目標管理制度とキャリア支援制度の仕組みについて講演をしていただき、それに対して製造業、サービス業の企業が5グループくらいに分かれて、グループディスカッションをして情報交流を図るということをやりました。少しずつではありますが形になってきたのではないかと思います。

もちろん東京や大阪等、また業界の中でも勉強になることはたくさんあると思うのですが、片や地元の企業様、今回も市役所の方に紹介していただいて、こんな会社様があるんだと、知らない企業様もありましたし、成功事例があれば横軸展開でお互い共有していけばいいですし、逆に同じことでお互い失敗する必要もないのですので、成功事例も失敗事例もよい意味で共有できればいいのではないかと。この研究交流会、先ほど全て行政でやらなくてもいいのではないかとかというご意見もありましたが、民間主導で交流会を継続したり、もしくは、行政の方にはぜひ「コーディネート」という立場で、地元の企業様であつたりとか、いろいろな情報を紹介していただければありがたいと思っています。

その時に1つ、この後の話になるのかもしれませんが、やはり子育て支援の保育サービスの課題が出まして、例えばサンキュードラッグ様や、弊社もそうですが、1つの会社でもお店の拠点が広範囲に散らばっていますので、なかなか1社で託児所を持つということも正直難しいですし、仮に持ったとしても、様々なエリアの店舗で勤務する会社のスタッフが全て利用できるわけではありません。そうであれば、拠点毎に保育サービスをシェアできるようなものをつくって、それに企業が共同で出資して、行政からはそのようなサービスが提供できる方を紹介していただいたり、コーディネートしていただくと大変といのではないかとという意見が出ましたので、この場でご報告をさせていただきます。

事例の1つということで、研究交流会の話させていただきましたが、机上の勉強だけではなく、先々には互いに工場見学、店舗見学や、社員同士が交流ができる場をつくっていったり、経営という立場はもちろんですけれども、これから10年20年後を支えていく若い世代たちの交流の場というのが、地元北九州にたくさん生まれるといいなと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。今、かなり重要な点が出てきたと思います。やはり場の提供というのが、今はどちらかというと、市民レベル、もう1つ違うレベルもあるということです。結局、昨日もテレビでやっていましたけれども、リノベーションをやって、先ほど言った民泊も、北九州はリノベーションでやりますとか、とにかく空き家はたくさんあるのです。全国で言えば、保育所を特区でやっておられる所はありますよね。だから、そういうところを特区が使えるというならば、それこそ空き家を使った保育所とか、そういうのをニーズに合わせて考えていければ、多分いろいろなアイデアが出てきて、本当に必要な場所に小さな保育園があって、そこが共通で使えますよみたいな。もちろん、それもビジネスをする方と分かれているという、特に今は家庭に入られている女性の方も、そういう所でうまく活躍していただくとか、それから、看護師の方で資格はあるけれど、やっておられない方をうまく使っていくとか、いろいろな手がまちづくりの中であれば、それこそ働きやすい場所の提供ができるのではないかと思います。

その辺の情報も入れてもらいながら、よその情報は使えるものから実施できる形にもっていくというような形で、そうおっしゃっていますような形ができたらいいなと思います。

ほかに、Ⅰ、Ⅱで何かありますでしょうか。

(林田構成員)

Ⅰ、Ⅱではないのです。飛び越えた発言になりますが、よろしいでしょうか。

新成長戦略については、私はいいと思うのですが、毎回、北九州市で問題点として上げられるのは、情報発信ということです。やっているのだけでも知らなかったよと。北九州市内でも伝わっていないとかいうことがあったり、恐ろしいことに、浅野に住んでいる方々が東京ガールズコレクションの日に、「あれは何だい？」と言っている人がいたことに、私は本当に驚いています。

いったいどうやったら、内部でどう情報交流ができるのかということと、あともちろん外部にもどのように発信ができるのかと思います。これを今後どのようにしていくのか、さらにはインバウンドということもあれば、さらには海外に発信ということにもなるわけです。

既に博多のほう、福岡のほうはSNSを行政のほうも積極的に使ってやっているというお話も少し聞いたことがあります。もちろん行政としても新しいツールをどんどん使うことが大切です。ユーチューバーも使えば、何でも使うというような、新しいことをアップデートしていくというか、毎年毎年そのツールと発信の方法というのは変わっていかないとはいえないと思います。今の時代はもう本当にいろいろなツールがあるということだと思います。

さらにはロボットということで、ファンレイジングもクラウドファンディングで、国内のクラウドファンディングでやるという企業があってもいいと思いますし、それはその中で話題が生まれるわけですし、もしくはトップスターダムという海外のクラウドファンディングを使うことで、またさらに外への発信になるツールというものが、そういうところであるわけですから、たくさんのツールを使うとか、そういうものを常にアップデートしていく必要があるのかなと思います。

さらには、にぎわいという面で情報というところで言いますと、いろいろな団体さんがおられるのですが、これほど区でまとまって、まちとしてまとまっていないというのが顕著なのは、過去もそうなのですが、そろそろ北九州市というまとまりがあってもいいのかなというのが、私もまちづくりのことをしながら思います。

門司港の集まりとか、小倉北区だけの集まりとか、黒崎の集まりというのはあるのですが、エネルギー大臣会合もあって、最近県警さんが主催なのですが、はた振

りをしてされているのは安心・安全の市街地活性化協議会です。取り組みとして、していこうということを、今、協議会として、私も委員としてやっているのですが、こちらのほうでも、北九州市が安心・安全なまちになったということを、どうやって発信をしていけばいいのだろうかというのが大きな課題にもなっています。

そのためには、やはり横のつながりというか、北九州市で活動をしている団体さんの連携というのが、さらなる相乗効果を生んで発信力が生まれるのではないかなと思いますので、技術面と、また物理的に協力をして、タッグを組んでいくというようなことをどんどんしていく必要があるのかなと思います。1つですが、インバウンドの話もあって、福岡のほうだと国際会議があるときには、商店街のほうとタッグを組んで、商店街のほうを歩いて回って、ちndon屋も一緒について回るといようなのがセットで、それを積極的に商店街さんのほうが、国際会議があるときには動いているという話も聞きました。私たち商店街側もそういった積極的な動きをして、インバウンドとか、国際会議とか、海外の方々はどういった体験をしていただけるかということを試行錯誤して、どんどんまちが盛り上がっていけばいいかなと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。今までも何度も情報発信の話は出てきていて、特例を、多分行政だけでは絶対駄目なので、民間の方とか、ボランティアの方とか、いろいろな形で、むしろ若い人のほうがそういう能力つけているので、若い人に任せたいほうがいいものがでてくるのではないかなという気がするのです。

(林田構成員)

付け加えですみません。発信するというのが、どこから発信するかということで、特に思うのが、東京に住んでいて、Iターンとか、Uターンとかいうのがありますけれども、北九州に戻ってきてという方もおられるのですが、北九州出身で外に出ておる方々をいかに取り込むかというのが、これからとても課題だと思います。

もう定年されて、だけど余力はあって、まちのために何かしたいけれども、物理的に離れているという方というのはたくさんおられるはずですから、そういった方々にも余力を願うというか、ということをしていけばいいかなと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。副市長、よろしいですか。

(梅本副市長)

今までのところで、まず情報発信の話は、再三いろいろな方から私どももご指摘を受けておまして、もちろん我々も市の Facebook だとか何だとかというのはやっております。でも、これは今、松永座長、あるいは林田さんがおっしゃったように、若い人たちとか、そういう別の切り口、レポートを書ける人たちというのがもっともっと SNS を利用して、発信していただくというのが非常に重要な話だと思います。

1例を申し上げますと、去年、河内の藤園が突然ブレークをして、その時期渋滞ができて、いわゆる消防車も入れない。これは地元の住民から何とかしてくれというような話があるくらいの状態だったのです。あれもタイのテレビドラマのクルーがこちらに来て、どこかいい所はないかといって、河内に藤園があるよと、そこで SNS へあげて、途端にブレークしたということもあるのです。

だから、そういう意味からすると、東京ガールズコレクションなどもそうなのですが、いわゆるモデルさんの Facebook だとか、モデルさんの Twitter だとかによって、ま

たそれで人が集まるということというのは十分あるので、我々も本当にこのある意味、すごさというか、恐ろしさというのは感じておりますので、いかにそういう発信力のある人をつかまえて、どういうふうによく発信していくかというのは重要なのです。私ももう、スタッフに言っているのですが、市のホームページなんて誰も見りゃせんや……。それはそれで、きちんとなさなければいけないのですけれども、そういうことをやはりやらなければいけないなということで、それは今でも続けて頑張っております。

それで、先ほど来、この主語の話とか、あるいは優先順位の話というのがございまして、主語ということからすると、この成長戦略、いわゆる産業振興とか成長戦略という話になると、主語は市ではないのです。基本的には相手が必ず全部いますので、我々としてはどうやって環境をつくっていったって、いろいろなステークホルダーの方々とお話をしながら、どういう環境をつくるかという話に全てなると思います。したがって、ここに主語を入れたほうが良いということについては、我々も簡単には入れられるのです。では、どの程度、どこの役割をどうするこうするというのは、個々によって違うので、そこをどうするかというのを1つ思いました。

優先順位の話につきましては、これはもう、まさにおっしゃるとおりで、これが全体のメニューだとしたときに、どういうところに優先順位を付けていくかというのは、それこそ、1つは毎年毎年の予算編成でどういうふうに付けるかという話、あるいはその時の状況に応じてということになります。もし、優先順位を付けてやるべきというのは、私もまさに気持ち的にはそのとおりなのですけれども、ある意味、これは全部メニューだと考える中で、ここと、こことここは優先順位をもってやったほうが良いぞというご意見を頂いておけば、毎年毎年の予算編成、あるいは政策の中でそれを活かしていこうというふうに思いますので、この中から優先順位を付けていけという、表に出していけというのは、なかなか役所としてはつらいところがある、ぜひそういうところも、ここでお願いできないかと思えます。以上でございます。

(松永座長)

私が言うのも変なのですけれども、これについては、具体的に成果が、数値が出てきますね。その伸び率みたいなものを見て……はっきり言って、伸びるものを伸ばしたほうが良いので、伸びそうにないのに力を入れても、なかなか伸びないわけです。やはり途中経過を見ながら、そういう判断をされていくというのは、推進室のほうでやられるということですか。

(梅本副市長)

それは、多分、この伸び率なども含めて、ここが伸びてきたなとか、あるいはここをもっとこうしたほうが良いのではないかという議論というのは、もちろんこの懇話会の中でいろいろ意見を賜りながら、最終的には市のほうで予算付けをどうするのか、あるいは位置付けをどうするかということを、その時その時の状況に応じて。全部できるか、半分くらいしかできないかというのがあろうかと思えますけれども、そういう議論もこの懇話会の中で賜れば良いなと思えます。

(船越構成員)

どこの企業に属しているかみたいな話から、優先順位を付けてくれという話になると、大変ややこしい話になるので、みんなが納得するのは、やはり少ない税金で多くのメリットを取るという考え方を軸にすべきと思うのです。

伸びを達成するために、たくさんの金がかかったら意味が無いので、基本的にはやはり、そういう尺度はある程度共有化しないと、俺は鉄鋼業にいるからこれしてくれとか、そう

いうことで言い出すと非常に良くない。そうすると、私はやはり、先ほどの特区とか、ロボットなどの話はかなり先行しているので、ある程度、今後の投入などは、それを優先していいといった考え方もすると思います。

ある程度前提を決めていかないと、それぞれの立場からいうと、また総花的になって取りまとめできなくなるので、そういう尺度みたいなことは、先生がおっしゃった尺度もあるでしょうし、私などはやはり応分の分子がどれだけ効率的かというようなこともあるので、そこはある程度決めないと、なかなか優先順位の議論には、実はいかないということではないかと思うのです。

(松永座長)

もう既にⅢの辺りまで入っているわけですがけれども、まずⅠ、Ⅱ、Ⅲの辺りで、他にご意見ございませんか。

(齊藤構成員)

こちらの方向性Ⅲにあります、サービス産業の振興のところ、特に私のほうで発言したいのは、「(2) にぎわいづくりによる集客交流産業の拡充」という箇所、今回、赤文字になっています加筆修正部分ですが、1つがインバウンド対策の充実に関して、まず最初にお話ししたいと思います。

この分野は、本当に日々環境がめまぐるしく状況が変わっているというところですので、これについての対策というのを、もう今、官民ともにスピーディーにやっていっているところだと思います。海外の方たちが、人たちがまだまだ日本が遅れている分野が2つあると。その1つがWi-Fiです。これはもう、どの海外の方もなぜ使えないかという不便さ、これをまず言います。これに関しては、素案の中にも一応Wi-Fiの整備という文言がありますので、徐々に環境が整うと思いますが、やはりこれは非常に重要な問題かなと思っていきますので、優先順位からすれば、ここの部分は強めにお願いしたいというところであります。

もう1点、外国人から見た、まだまだ日本のやれるところみたいなものですが、空港の活性化です。もっと空港は稼げると、なぜ日本の空港はこんなに楽しくないのかと言っています。市長が冒頭に、空港の活性化とおっしゃっていましたので、いろいろもっと便数が増えたりとかなってくれば、ますます空港の中で、いかに滞在時間を増やすことができるかということで、ここの分野は、北九州空港は余力がまだまだ十分あるのではないかなと思っています。

深夜とか、早朝という便のことを考えれば、空港の中に宿泊施設があってもいいよねとか、もっと休憩できるスペースがあったらいいよねとか、そういった宿泊機能に加え、物販、飲食、もっとも滞在時間が増えれば付随して、ニーズといいますか、需要が見込めるところも出てきますので、こういったところを含めて、空港の、飛行機の便数プラス環境の活性化、両方の面からもっと手を入れていけば、外国人客を十分におもてなしできるのではないかなと思います。

インバウンド対策に関しては、そういった点ですが、もう1つ「6次産業化の推進及び食品ビジネス支援による食の産業化推進」ということが赤文字になっています。これもインバウンド絡みで、含めて食の魅力というのは、訪れる人、あるいはここに移り住もうとする人も含めて、やはり非常に重要な要素になってきます。

この食に関する魅力発信というところですが、今、私は食の魅力創造発信室から依頼を受けまして、月に1回、東京のマルシェ、日本最大級のマルシェといわれている「太陽のマルシェ」に出展販売をしています。それは、市内の生産者が作ったお野菜だったりとか、加工品などを一堂に集めて、販売代行という形でPRしているのですが、9月からスタートして、9、10、11、12、1と5回、既に終わったところです。

東京に対して、北九州のものだと伝えても、「え？」という反応がありまして、1つの課題としてまだまだ認知が弱いかなというのを、実際に現場に立ちながら実感しているところです。こういったところは、民間である程度力を付けて進めていける分野は大きいのかなと思っています。ただ、その時に、支援、サポートというのが、食の領域というのは、製造メーカー、生産者を含めて、民間の力が十分に活かせる領域だとは思いますが、そういった支援に関しては、白か黒か。もう今年で全部終わりですとパサッと切られるより、きちんと民間の力で一人立ちできる部分を段階的にサポートいただけるような体制があれば、いろいろ生産者の方も商品開発とかそういったのもできていけるのかなとは思っています。

この食に関して、やはり思うところなのですが、北九州のものという表現をしても、なかなか反応していただけないところがあるのですが、もう少しエリアを広げて、北部九州ということで、関門というキーワードだったりとか、あとは日豊線沿線の行橋、苅田、この地域はまだまだ、それこそ知名度が低いのかも分かりませんが、そこを含めた広域連携の食というPRも十分あるのかなと。そうすると、食材も広がっていきまじし、取り扱うものも広がっていくということで、九州の玄関口になる関門エリア、それから東九州道の沿線付近のことでの日豊線関連の地域連携というところをうまく結び付けて、つないでいけば、もっともっと食のアピールというのはできていくのではないかなと思っています。

ですので、この食に関して、民間自身が頑張っていてやって、取り組んでいってますが、それと同時に、行政にコーディネートしていただくという、こういった広域連携の部分だったりとか、そういったのは引き続きサポートいただければ、十分に民間がきちんとテイクオフしていけるのではないかなと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。はい、どうぞ

(福本アドバイザー)

まず雇用創出2万人という目標についてです。経済成長は「労働力の増加」と「労働生産性の向上」の掛け算で決まります。この際、順番としては、労働力(雇用)の伸びを最初に考えるよりは、むしろ労働生産性を上げるほうを重視したほうが良いと考えます。労働生産性が上がれば、企業は儲かる。儲かれば、企業はより高い賃金を出すようになる。そうすると人が来て、雇用が増えるという好循環を生みます。したがって、労働生産性の向上が成長戦略の1番の基本だと思います。

その意味で、どこに重点を置くかですが、北九州市にとってサービス業の生産性向上にはかなりの「伸びしろ」があると思います。

日本銀行北九州支店で実施する企業短期観測調査(通称「短観」)では、企業に対して、人手不足か余剰かを聞いており、これを雇用判断DIのかたちでフォローしています。昨年12月短観をみると、全産業では、人手「不足」超がマイナス17、要するに人手が「不足している」との回答が「余剰である」との回答を17%ポイント上回っていました。ただし、内訳をみると製造業は、実は、プラス2の「余剰」超で、非製造業がマイナスの29の「不足」超。非製造業に人手不足が集中している状況です。非製造業のマイナス29という水準は、1992年以來の深刻度です。91年、92年もかなりの人手不足でしたが、当時は製造業の方が、人手不足が深刻だった。91年の2月調査では、人手「不足」超幅は製造業がマイナス63と非製造業のマイナス41を上回っていました。

これは何を意味するか、この20年間の非常に厳しいグローバル経済化の中で、製造業は、いろいろな意味で生産性を上げる努力をされてこられた。その結果、北九州の製造業の労働生産性——これは付加価値を就業者数で割った労働生産性は、1,200万円と、全国平均

の980万円より高いです。その一方、非製造業の労働生産性は720万円と、全国の平均の770万円を下回っています。この2つのデータをどう見るかですが、私は、非製造業の労働生産性の向上が十分に進まなかった結果として、現在、非製造業に人手不足が出ているという面があると思います。逆に言えば、まだまだ労働生産性を非製造業で上げられるだろうと考えています。

昨日、梅本副市長、濱村社長も参加されたサンキュードラッグの60周年記念行事において、いろいろ貴重なお話を伺いました。同社は、顧客データを有効に活用してマーケティングをされています。例えば、妊娠した女性が妊娠0日から何カ月目にはどういうものを買っている、何カ月目はどういう買い物か。育児の段階では何を買っているかというのをデータ化して、それで顧客ごとに広告を打っていく、といった様々な施策により、付加価値、労働生産性の向上を実現されておられる。また、同社が素晴らしいのは、潜在需要発掘研究会を立ち上げ、同社のノウハウを各社と共有して、みんなで生産性を上げていこうとされている点です。

同様に先ほど濱村社長がおっしゃった製造業と非製造業の交流研究会も非常に意味があると思います。また、北九州市でも、零細のサービス業の生産性向上をサポートする趣旨から、コンサルタントの協力を得て企業に経営改善を指導し、その結果、在庫管理が改善し、売れ残りが少なくなったという例もあると聞きました。生産性向上の成功体験を共有することで、非製造業の「伸びしろ」はかなりあると感じています。

それと同時に人手不足の解消も重要です。先般、同僚が、市の企業誘致担当にお話を聞いたところ、企業誘致は順調ながら、少し頭打ち感があるとのこと。その大きな要因が、人材が確保できないという要因だと聞きました。そういう意味で、市も、現在、地元学生の就職自体の割合は3割だけど、実際に就職しているのは2割であり、この1割のギャップをどう埋めるかという取り組みをされているということを知ります。

それから、これは国家戦略特区でできるのかどうかは分かりませんが、外国人の就労ビザ基準の緩和も検討に値します。政府は、高度技術人材については外国人の就労ビザ発給に積極的です。しかし、実は高度技術人材でなくても、例えば飲食店チェーンでも、勤勉な外国人留学生を正社員として採用して店長を任せたいという会社があります。しかし、飲食店は単純労働のため、外国人に就労ビザが出せず、その結果人手不足が解消せずに新規出店が思うように進まないという話を聞きました。外国人の雇用拡大という面も、検討の余地があると考えます。

最後に、インバウンド消費について1点だけ申し上げます。当地ホテル業界の方にお話を伺うと、外国人客が前年比倍増ペースで増えていると聞きます。では、北九州市全体でどれだけ増えているのかを調べようとしても、直近のデータは、去年の夏に発表された2014年1年間の数字しかない。これは、いかにも遅すぎるのではないかと思います。

刻々と変化するインバウンド需要を獲得するうえで、JNTOは全国レベルでは、国籍別、消費分野別に、タイムリーに細かく調査をしています。北九州市でも、外国人観光客動向について、なるべくタイムリーに把握するための統計の整備を、ぜひともお願いしたいと思います。

(松永座長)

ありがとうございます。

(梅本副市長員)

最後に一言だけ。外国人の観光客の話は、私も全く同感なので、ぜひスタッフのほうで早く調べてもらおうと思います。

昨日、実は、帆柱ケーブルというのがありますね。あそこに大体年間で7,000~8,000人、

台湾、韓国、特に韓国が多いのですけれども、来ているという話を聞いて、お客さんが伸びているのです。経営も楽になってきたという話もあって、私もさすがに帆柱ケーブルに外国人がそんなに多いのかというのは少し意外でしたけれども、バスでドンと何台か乗り継いで、ドンと上に上がってくるという話もあるのです。実態としては、結構いろいろな所に、ばらばら来ているのではないかという思いもありますので、その辺はぜひ実態をできるだけ急ぎ調べたいと思います。

あとは、皆さんのご議論にお任せします。

すみません、今日は議会がありますので、これで退席をさせていただきます。

(松永座長)

ありがとうございます。すごく重要なことを言われて、特に先ほど言ったように、インバウンドの話は、本当に刻々と変わっていると思うのです。これは、対応の速さの勝負みたいのところになっていっていますので、ぜひ。我々が想像しないような所に、彼らは興味を持つので、そこはやはりいろいろな手を使って、その動向を調べながら手を打つ。すぐに手を打たなければ意味がないので、それはお願いしたいと思います。

(自見構成員)

素案の7ページの上のほうに、戸畑のちょうちん山のことを書いていただいているので、去年の12月に戸畑のちょうちん山を4基担いで、宇佐神宮に行ったのです。宇佐神宮は10年に1回、勅祭といって、皇室から使者が来るのですけれども、そういう記念の年なので、それを祝うために、わざわざちょうちん山を担いでいって、協力しましょうといってやったのです。その時に結果として、その実行委員会に対して、宇佐市が50万円くらいの金をくれたのです。いろいろな形の中で情報発信をするとき、やはり点と点の結び、どういう分野のところはどういう発信をすればいいか。

昔、25年以上前ですか、今でもあります北九州活性化協議会ができた時に、私が初代のC I 専門委員長を務めていたのですが、それは当時C I ブームだったのでシティ・アイデンティティ、どうやって全国に発信していますか。金はほとんどなかったのです。

そういうときに、先ほどどなたかから話がありますが、とにかくやはり、どこかの著明な人に何かを発信してもらおうということが、非常に効果が大きいので、とことんそれしかないという説を当時唱えたのです。当時、行政がどういう広報誌を出していますかと、全部取り寄せたら、5～6誌か、たくさんありました。行政は今、こんなにたくさん発信しているのと。その作っている物自体は、立派なものを作っているの、どこに置いているのということから、その時、多分これを受け取った人は、ばらばらとめくって、即くずかごに、ぽんと入れるのではないのと。そういう関係のないルートで、いくら発信しても何もメッセージは伝わりませんよと。

だから本当の意味で、北九州の何が気に入ったとか、何とかということをつらっと並べたら、有名人にしゃべってもらおうとか、そういうことに力を入れましょうよというような発信したのですが、そういう流れが、今の文化大使とか何とかということと同じような精神だと思うのです。その時に、文化大使に任命したら、きちっと今の時点での北九州のありようを教育してほしいのです。へたしたら、芸能人は何度も、自分が育ったころの北九州のイメージで、公害のまちで、やくざのまちみたいなことを平気でしゃべりまくる。そういうのが回り回って、逆効果が出ているのが結構ありますので、その辺は十分注意をしていただかないと、この5年、10年、20年の、北九州市の変わりようというのは、ものすごくいい方向に変わってきていますので、そういうことがあります。

それと、たまたまちょうちん山が、今年の秋に全国33のまつりと同時に、ユネスコの文化遺産に多分なるのではないかという話があります。先ほど林田さんがおっしゃっていた、

各まちごとというのはまだずっとあるわけです。全体で何なのと言ったときに非常に難しいので、ちょうちん山だけが格が違うのではないかと、そういうことを言うわけにもいかない文化の背景もあります。そういう時に、宇佐と交流を持ちました。宇佐の人は市長、台上がりしてもらって、そのお祭りを見た宇佐の市民は、大感激してくれたのです。今度、絶対本番を見たいと。

そういう形の中で、今までも伊勢神宮とか靖国神社とか、そういう所にちょこちょこ行っているのですけれども、片一方ではそういうイベント化してしまってもいいのかということと、今、国の重要無形民俗文化財に指定されていますので、これの指定は、1つは何百年に及んで、いかに昔からの伝統を守ってしっかりやっていますかということが、ベースではあるのです。そういう形の中での、単なる観光事業に寄与するからということだけではなくて、どうやったらきっちり伝統を守りながら、なおかつ、みんなに愛される祭りに育てていくかと、そういうことがいろいろあります。

先ほど、浅野の人が東京ガールズコレクションを知らなかったという話がありますけれども、昔、私が印象に残っているのは、ハウステンボスを作った神近さん、彼の話をよく聞く機会があったのですが、一番最初に彼が考えたのは、やはり地元の人にとにかく来てもらわないといけないからと、長崎県内だけガンガン、ガンガン宣伝広告を流したと。ところが、あるときはっと気がついたら、本当に興味のない人というのは、テレビを見ていてもそうでしょうと。自分と全く縁のない商品のコマーシャルがいくら流れていても、ほとんど見もしない、聞いてもいませんよと、それと同じですと。ハウステンボスに来てもらいたい人といっても、そういうのに興味を持っている人とのパイプをどうやってつなぐかということで、本当に長崎県民全部といっても、それは絶対に無理なのです。長崎の中で1割か2割の人が来てくれる。そういう人をいかにリピーターに育て上げていくかと、そういう特殊なユーザーに対する発信力を作っていくしないと、広く宣伝すれば、何か浸透するという事はないのですよねということがありました。

そういう意味で、昨日、おとといもテレビでフィルムコミッションの人が、全国の修学旅行を何件か呼んだとか、いろいろな分野の中で、ああいうのは行政がやらなくても、街同士がいろいろなパイプをどうやって作っていくかと。そういうことが非常に必要なのだろうと思うので、あまり大上段に行政がやるというのも、効率が悪いのかなとか、昔からそういうことをしばしば感じております。

(松永座長)

時間がもうなくなってきたのですが、IV、Vのご意見を頂きたいのですが、何かIV、Vでご意見ございませんか。

(船越構成員)

Vについて、なかなかA3の紙だけだと少しよく分からないところがあるので、11、12、13 ページのほうに展開されているわけですが、11 ページはまだ分かるのですけれども、12 ページは全部読むと、原発、水力発電以外、全部やってもいいと言っているように読めます。かつ、赤字のところを見ると、そうは言ってもなかなか、発電所を造るというだけの問題ではないので、周辺産業含めて、それに関わる関連産業を響につくりたいよという話と、なかなか発電を呼び掛けても、やはり送電の能力がないと、なかなかうまくいかないので送電網の話も書き足しましたみたい、要は、書いてあることを全部足し合わせると、ほとんど先ほどの優先順位ではないのですけれども、何をやろうとしているのかが、さっぱり分からないというふうに、私は読めるのです。太陽光は九電もこれ以上買わないし、後は、風力をどれだけ J-POWER さんのほうでやられるのかという問題があって、恐らく電源の問題よりも、関連産業と送電線のほうに……。政策の軸が変化している中で、そ

この軽重をつけずに過去からあるものを全部一旦書いているように見えます。

例えば、これは優先順位の1つの例の話だと思います。(3)に至ると、さっぱり分からないのです。例えば、釜山広域市とのエネルギー協約を結んだというのはいいとして、そこを含めて、広域貢献するエネルギー網という、すごいことを言っているわけなので、(3)はほとんどなくてもいいし、企業間の余熱の調査を進めて、電力・熱などの企業間相互融通の可能性を検討しますと、これも相当なことを言っているのです、優先順位ということからすると、対象から外してもいいくらいです。

水素の件は、ハードの問題いろいろあると思うのですが、言われることは分かるので、例えば、優先順位だと、ここのVで見ますと、少し過去の残材と新しくやりたいことが、ごちゃっと混ざって、何かよく分からないなという感じになっている印象がものすごくします。すみません。もし、私の理解が間違っていたら教えていただきたいです。

事務局（室長）

まず、電源の話ですけれども、響灘は九州電力さんとずっと議論させていただいて、ご意見も伺って作っているものでありまして、短期的には80万kWくらいまでは余力があることと、将来計画まで入れると300万kWくらいいけるということで、既に今、新聞によると流動的になっていると言いつつ、160万kWくらいは西部ガスさんが、既に送電線を押さえているという形です。逆に言えば、それだけ送電線の余力があり、ここは非常に電力の素地があるということで、実際に既に1社、環境アセスを終えまして、今、バイオマス混焼の石炭火力発電の建設を開始したということで、その辺は、九州電力さんときちんとインフラがあるかどうかについては、調べているところであります。

それから、(3)ですけれども、これも、もう市のほうで、東京エコサービスに続いて日本で2つ目になりますけれども、行政が出資して、地域エネルギーガスというのを立ち上げて、4月から稼働するようになっております。その中で、省エネ再生可能エネルギー、基幹エネルギーをうまく組み合わせて、安い電力を供給するという事業を開始するようになっておりますので、優先順位としては、高いのかなと思っていますところであります。

（船越構成員）

今のことは、特化と書かれたほうがいいと思うのです。相当、ここに書かれていることが、風呂敷が広いのです。

（松永座長）

かなりスパンの長い話が入っていますので、短期的にできるものと、できないものがあるのです。

事務局（室長）

今おっしゃるように、考え方としては、以前からこういう考え方でずっときているわけです。少し今、おっしゃるように考え方も変わっております。新しいこともできておりますので、それに合わせた形で、少し表現は見直しをさせていただきたいと思っております。

これは全部やるというのは、なかなか難しいので、強弱というのは非常に大事だと思っていますので、少しその辺は考えたいと思っております。

（松永座長）

もう後、10分以内になりましたので、どうしても言いたいということはありませんか。

(石田構成員)

先ほどから、情報発信の表現の話と、優先順位の問題といろいろ出てきていますけれども、やはり、実行することを全部書いていることに、少し行き詰まり感があって、税金を使うから、お金を使う施策は全部方向性として書かなければとか、あるいは金額が大きいものを書かなければという考え方によって、市民に同意を得るという観点から考えたときに、書くべきこと、メッセージすべきことから乖離してきているような気がするのです。この成長戦略は誰に向けたメッセージか、を考える必要があるのではないのでしょうか。

先ほど、施策実行の主語は市ではない、各々の施策には企業など、主語が紐ついている、とのお話がありました。誰がやるかがはっきりしていること、もしくは、30年後か、20年後か、将来のために必要なことがあるときに、必ずしもそれを成長戦略のテーマとしてここに書かなければならないのでしょうか。企業はやはり、地元の力を利用したいけれども、自社の利益を追求していくので、必ずしも常に利害関係が一致しているとは限りません。たまたま今、手を握っているだけかもしれない「主語のあること」を、本当にここに全部書く必要があるのでしょうか。

そういうものは別に、やはり、みんなで北九州の良いところを共有しなければいけないということがあって、単に、国の戦略をブレークダウンしてきたものを、ここに入れ込むのではなく、北九州としての強み、あるいは弱いものだけでも、これから先、北九州を良い都市にするには、ここはどうしてもやらなければならないという、そういうメッセージ、こういう都市にしたいというイメージを打ち出すべきではないのでしょうか。そのイメージから考えた優先順位は、企業がやろうとしていることを取り纏めた施策とは少し違う気がするのです。それが混ざって一緒に並べたために、国の戦略とあまり変わらないように思えてしまいます。市として実施すべきことを書かないとやれないというわけではないので、もう少し、情報発信とか、みんなで良さを共有するとか、北九州をこういう方向にしたいということに、主眼を置いた書き方をすべきなのではないかなと思います。

例えば、ロボットというと、どうしても安川電機の名前が出てきてしまうのですけれども、本当に安川電機のロボットが必要なのかと言うと、そうではないかもしれません。ロボット産業を興すことは、市の産業振興のために、それは市民にとっては安定した「働き口」の確保であり、ロボットを使うことによる労働生産性の向上でもあり、豊かな暮らしでもあるのかもしれない。ではそのために、どんなロボットが北九州にとっては重要なものというのは、必ずしも安川電機がやりたいことではないかもしれません。例として、「ロボット」「安川電機」を引用しましたが、そういう形で、市民目線でのあるべき論や長期的にこういう街にしたいという視点に立ったまとめ方が必要なのではないかなと、感じました。

(松永座長)

ありがとうございます。あと5分くらいなので、まとめなければいけないのですが、いろいろ意見を頂いたのですが、もっともな話もあるのですけれども、全般的に、間違いなく少しずつ進んで行っている課程で、今までとは違う表現にしなければいけないのではないかと、進展図に応じて、マッピングみたいなのが変わってきているので、そういうところに少し特色が出てくれば、やはり政策の強弱もこれから出てくるかなと。今日、そういうところのご意見を幾つか頂きましたので、来年に向けて、また検討いただければと思います。

今日、非常に重要だと思ったのは、市民にどう発信するか、市民にどう理解してもらうか。そうすれば逆にいうと、市民の人から勝手に情報がどんどん出てくる可能性もあるので、いろいろな人の力を使うためには、まず理解してもらおうというのが、第1のレベルで、もう来つつあるのではないかなと思います。

市民レベルで言えば、特区と言ってもよく分からないのです。何をやるのかというのを、理解してもらうのは本当に難しいと思います。市のほうで、特に広報をかけて、これからどのような方向性でやっていくのか、誰をターゲットにするのかというところは、少し深めていただければと思います。

それでは、たくさんご意見頂きましたので、全てを総括するのは無理でございますので、これで、大体時間が来つつありますので、終わりたいと思いますが、それでよろしいでしょうか。これは、今年度最後になりますので、構成員の皆様方、本当にいろいろご意見を頂いて、ありがとうございました。それでは、事務局のほうに議事をお返しします。

事務局（室長）

本日は、大変活発な意見交換いただき、ありがとうございました。本日頂きました意見は、市役所内部にフィードバックして、戦略推進や、見直しの参考にさせていただきたいと思います。その間、皆様に個別にご相談させていただくこともあるかと思いますので、そのときはどうぞよろしくお願いいたします。また、皆様からのご意見がありましたら、またその都度、事務局へお寄せいただきますよう、よろしくお願いいたします。

それでは最後に、産業経済局長の西田より、閉会のご挨拶を申し上げます。

（産業経済局長）

今日は、いろいろな活発なご意見を頂きまして、本当にありがとうございます。

今日お示した内容につきましては、やはりテーマとしては、5つの方向性、これは非常に大事なテーマだと思っております。ただし、その中身で、やはり古い表現であったりとか、この前、会議所でも結構言われたのですが、増えるばかりで減るものがないですねというようなことも言われたりしました。

そういうところで、今日、いろいろご議論いただく中で、強弱の問題をもっとつけたらどうかと。また、行政と民間との役割分担の問題、広域連携の問題、それから情報発信につきましても、もっときちんと説明できるように教育したほうがいいのではないかと、Wi-Fiの問題とかございました。新しいニーズとしては、ものづくりとサービスとの交流。これで新しい生産性向上に向かっているとかいうお話も頂きました。エネルギーの問題についても、私どもとしては非常に大事な部分だと思っております。中身をどうするかについては、少し考えさせていただきたいと思っております。

今回、エネルギー大臣会合が北九州に決まったと。これは、経産省が北九州でないと駄目だと言われたのです。北九州はやはり、新しいエネルギー分野に取り組んでいる。これを世界に発信する必要があるということで、経産省もだいぶ、内部でいろいろと調整していただいた部分もございます。そういう形で、テーマについては、私ども情報発信、この分野を特に、この5つの分野の中身をしっかりと情報発信をしてまいりたいと思っております。ただし、情報発信の仕方、表現の仕方、これについては、今後見直しをやってまいりたいと思っております。

個別の事業につきましては、また、アクションプランを見直して、具体的には、強弱をどうするか、地域連携をどうするか、民間との役割分担をどうするかということについては、庁内で揉んでいきたいと思っております。また、これは外に出るときには、しっかりアピールできるように、頑張りたいと思っております。

なお、今年度をもちまして、現行の新成長戦略におけます推進懇話会が、1つの節目となります。構成員の皆様におかれましては、今まで貴重なご意見を頂きまして、本当にありがとうございました。今後も引き続き、本市の産業振興のために産学官民それぞれのお立場から、お力添えを頂きたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

事務局（室長）

それでは、第6回の北九州市新成長戦略推進懇話会を終了させていただきます。皆様、ありがとうございました。